

南北統一で

(超 大 国)

世界のハブ化する



朝鮮半島と

日本のとるべき

針路

中丸 薫



トランプと金正恩で激動する世界を読み切る

レアアースは中国の6倍、
その他北朝鮮の無尽蔵とも言える
鉱物資源の利権をめぐって
中国、ロシア、イギリスはすでに
鎬しのぎを削っているのです！



南北統一で陸路も海路も
ヨーロッパまで一つのユーラシアで
巨大な経済圏の構築が
なされようとしています！



世界がアメリカの
ドル基軸通貨を見限って、
独自の経済圏に移行を目論んでいる中、
日本のとるべき針路について
緊急に重要な提案をしたいと思います！



プロローグ 朝鮮半島でこれから起こる事

P-1	米朝接近で次に起こる事	14
●	朝鮮半島に新たな歴史が刻まれる	14
P-2	非核化外交交渉の行方と日本の選択	18
●	朝鮮半島の核。非核化への道	18
P-3	トランプ大統領を変心させた金正恩氏の「親書」	24
●	米朝会談の裏の「主役」	24
P-4	北朝鮮の知られざる国力、資源力と可能性	27
●	人口7600万人の朝鮮半島がアジアの「ハブ」となる	27

第1章 日本と朝鮮半島の深い関係

1-1 東アジア外交。「蚊帳の外」の日本が今なすべきこと 34

● 歴史的・南北首脳会談、奇跡的な米朝首脳会談の実現 34

1-2 6月12日、米朝首脳会談の「奇跡」 38

● 米朝首脳会談への紆余曲折のステップ 38

● 開戦から和解 41

● 6月、米朝首脳会談の裏で動いた物 45

● 顕在化した中国・「習近平主席の影」 50

1-3 北朝鮮が米韓軍事演習に極度に反発する理由 54

● 「演習」が「侵攻」に展開する米軍演習 54

● 「和気あいあい」の首脳会談で何が話されたか 57

● 首脳会談前夜、金委員長が訪れた場所 62

1-4 日本の植民地支配と朝鮮半島分断 66

● 日本は朝鮮半島にどう関わってきたか 66

● 朝鮮戦争に参加した日本 69

- 悲惨な戦争に、ピリオドを打つ必要 77

コラム① 金鐘泌元首相との長年の交友 80

第2章 北朝鮮と韓国が展望する未来

2-1 金日成主席との会談へ、使者が直接訪ねてきた

- 「世界平和シンポジウム」の後に 84

- 「タンクは走っていませんか!？」 87

2-2 カメラクルーを同行して撮った北の真実

- 自分の目で見た「北朝鮮の真実」 94

- 出産から育児まで、手厚いシステムがある 99

- 「万景台学生少年宮殿」での驚きの体験 103

- 「金策工業総合大学」の一心不乱の学生達 104

- 質素で堅実な農村地帯の暮らしぶり 106

- 北朝鮮の発展への活力 110

- 情報設備から体育設備まで整った大学施設 111
- 通訳男性が与えられた学習環境 113
- 「開戦前夜」に訪れた北朝鮮での意外な経験 114
- 活気あるピョongan市内に充実する娯楽施設 118
- 2-3 「世界の孤児」は日本マスコミの捏造 122

- 北朝鮮と国交がある国は160カ国以上 122
- 日本と朝鮮半島の歴史の真実を知るべき 125

コラム② 中丸忠雄の緊急入院、治療 128

第3章 北朝鮮の知られざる国力

- 3-1 北の資源の潜在能力 134

- 秘められたウラン、レアメタルの価値 134
- すでにつながっている「南北」の鉄路 136
- 朝鮮半島の進展とリンクする中国の戦略 138

3-2 質素な金日成主席の生家が北朝鮮の力の根源

140

●金日成主席とロシア、中国との関係がバックボーン

140

3-3 ロシア、中国との連携で、朝鮮半島は飛躍する

144

●今後の世界の「鍵」を握る、ロシアと中国との関係

144

●日本が果たすべきだった「アジア国際秩序建設」

150

コラム③ 北朝鮮のイメージ向上戦略

152

第4章

朝鮮半島に新たな王国が誕生する

4-1 朝鮮半島には「王国」が存在した

156

●北朝鮮がイメージしている「李王朝」の系譜

156

●合議や選挙で完成される「現代の王国」

161

4-2 「烟中理」ことキム・チェクが描いた王国とは

164

●大日本帝国と総督府が「全力を投入した」半島発展

164

●北朝鮮の軍隊を育てた日本人「烟中理」

170

● 朝鮮半島に大日本帝国の拠点を築く 173

4-3 横田めぐみさんの重要な役割 176

● 横田めぐみさんの存在が日朝関係の行方を左右する理由 176

● めぐみさんは、北朝鮮にとって「特別」な存在 179

● トランプ大統領は、めぐみさんの手紙で「変心」した 183

コラム④ 拉致問題解決への道筋とは 188

第5章 朝鮮半島と日本とアメリカが描く未来

5-1 米朝非核化交渉はどんな結果をもたらすか 192

● 南北首脳会談実現への布石 192

● 南北首脳会談開催の条件 197

5-2 核をめぐる攻防。「第1幕」 199

● 北朝鮮にとっての「核兵器」とはなにか聞いた 199

● 金正恩委員長、核実験中止宣言の背景 203

5-3 歴史が動いた「南北首脳会談」……………209

● 歴史に残る「政治エンターテインメント」……………209

● 「意外」なユーモアとウィットを見せた金委員長……………212

● 「板門店宣言」発表の裏側……………217

5-4 トランプ大統領が描く世界の未来像とは……………223

● トランプ大統領の「外交」戦略……………223

● ついに実現した歴史的「米朝首脳会談」……………225

● 6・12 米朝首脳共同声明の意味するもの……………230

● 軍産複合体との葛藤の中で……………235

5-5 「CVID」 完全で後戻りできない非核化の意味……………241

● 朝鮮半島「非核化」へのステップ……………241

● 非核化の前例は「リビア方式」、「南アフリカ方式」……………244

● 中国を「後ろ盾」にする北朝鮮……………248

5-6 朝鮮半島「非核化」は、日本の責務……………253

● 核兵器禁止条約との関わり……………253

● 「核廃絶」は、米ロも目指さざるを得ない目標……………255

エピローグ

日本は東アジアで重要な役割を担う

E-1 日本がアジアでの安全保障で選ぶべき道

264

● 「被爆」し、「戦争放棄」した日本だから、「非核化」を主張する

264

E-2 日本の核武装を最も恐れているのはアメリカ

269

● アメリカが恐れるのは日本が近隣国と友好を結ぶ事

269

ブ
ロ
ー
グ

朝鮮半島でこれから起こる事

P 1 米朝接近で次に起こる事

●朝鮮半島に新たな歴史が刻まれる

2018年は、世界史に刻まれる年となりました。

激動の世界情勢の中、朝鮮半島での動きがその輝きをひととき増し始め、改めて北朝鮮という国の存在と、その秘められた可能性を世界に知らしめた年として記憶される事となったのです。

18年4月27日に南北朝鮮の軍事境界線上にある板門店^{パンムンジョム}で、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）^{キンジョングン} 国務委員会委員長・金正恩と韓国（大韓民国）大統領・文在寅^{ムンジェイン}が、07年以来の南北首脳会談を実現しました。

それは、まさに68年来の敵と味方が和解するドラマで、南北の市民にとってだけではな

く、日本の私達にとっても、他の国々の人々にとっても、ほんの数カ月前には想像も出来なかった「歴史的瞬間」でした。

そして、6月12日、アメリカ合衆国大統領、ドナルド・トランプと金正恩委員長との首脳会談がシンガポールで実現しました。

半年前に、この二つの「歴史的奇跡」が現実となる事を予測し、予言した人が、どれほどいたでしょうか。

4月末の南北首脳会談では、「板門店宣言」が共同で行われました。

その中には、朝鮮半島での戦争の終戦、南北統一へのプロセス、「朝鮮半島の非核化」などがはっきりと謳うたわれました。もちろん、平坦へいたんな道ではありませんが、65年間の恩讐おんしゅうを超えて、和解と統一への道へ一歩踏み出した事は間違いないのです。

6月の米朝首脳会談では、さらに進んで「南北平和と非核化に向けて迅速に実行する為に交渉する事」、そして、ポンペオ米国务長官がその実務に当たる事などが目標として取り決められました。

もちろん、これも平坦な道ではありません。

1950年の朝鮮戦争勃発以来、68年間の長きにわたって、北朝鮮と韓国、そして、関係するアメリカ、中国、さらに日本は、困難な時代を経験してきました。

この長く、暗い時代が、一気に「輝ける時代」へと転換した、そんな年として2018年を記録するべきでしょう。各国と日本の私達は新たな時代の到来を目撃しているのです。朝鮮半島の輝きを、二度と失わせてはならない、そんな重要な時期に、図らずして移行しつつある、というのが著者の感慨です。

私がつとも望んでいたものの、「南北統一」が、今、現実味を持って語られ、関係国によって推し進められています。そんな現状とその背景を、本書では分析し、真に輝く未来へとつなぐ、重要なメッセージとして世界に発信したいと願っています。

次に起こる事は、「争い」や「破壊」ではなく「平和と安定」、「繁栄と発展」でなければなりません。

長年、朝鮮半島の問題と関わってきた私が心から願うのは、極めて単純な事。「朝鮮半島と東アジアの真の平和の確立」です。

本書が、その一助となる事を、私は確信しています。その根拠は、本書を読んでいたただければご理解いただける事と信じています。

「朝鮮半島で次に起こる事」には、実は、日本の政府、日本国民一人ひとりが、深く関わる事となります。いわば、「運命的定め」によって歴史は形作られるのです。

その由来と真実を本書でお伝えしたいと思います。

P12 非核化外交交渉の行方と日本の選択

●朝鮮半島の核。非核化への道

18年4月の南北首脳会談では、板門店宣言で、南北の平和と統一への道筋、いわゆる「ロードマップ」のような段階が示されました。

まず、南北間の軍事的緊張をなくし、終戦宣言から平和協定へ。そして、「朝鮮半島の完全な非核化」へという道です。

しかし、その内容には、北朝鮮の核兵器とミサイルに関する具体的な廃棄への道筋が示されませんでした。

その一つの理由は、現在休戦状態にある朝鮮戦争の「休戦協定」の当事者が、北朝鮮とアメリカ（国連軍）、そして中国の三者であるところにあるでしょう。韓国は、「休

戦協定」には参加していません。

さらに朝鮮半島の非核化を現実に進めるのは、実際には、韓国ではなくアメリカ主導になる事から、南北会談では、具体的には示されなかったのです。

そして、実現された米朝首脳会談によって、「非核化」へのステップがある程度示されました。ただし、6月の米朝首脳会談の直前に、トランプ氏がいったん会談の中止・延期を公表した事に示されるように、このステップは、核・ミサイル・多数の核関連施設をいかにして廃棄するかという、極めて困難なハードルを伴います。

もちろん、北朝鮮としては、アメリカの言いなりにすべての核やミサイルを放棄、廃棄する事は出来ません。

北朝鮮は、イラクのサダム・フセイン大統領や、リビアのカダフィ大佐が、欧米との力関係の中で、どのようにして欧米勢力に侵略され、蹂躪じゅうりんされ、最終的には抹殺されていたかを、反面教師として教訓化しています。

北朝鮮にとって、「非核化」は、もっとも重要な外交手段の一つで、アメリカを交渉の場に引き出した、一番の「カード」でもあるのです。

いわば「切り札」ですから、例えば、トランプ政権内の対北朝鮮強硬派のボルトン大統領補佐官が、一時発言していたような、「リビア方式」の非核化をすんなり受け入れるわ

けにはいきません。

北朝鮮の外交手腕は、日本政府はもちろん、韓国のもそれより明らかに熟練していて、レベルが高いと考えたほうがいいでしょう。つまり、「朝鮮半島非核化」について、アメリカや韓国が想定している条件や思惑は、簡単には通じないという事が明らかです。

7月25日に、ポンペオ米國務長官は、「北朝鮮が、核物質の生産を続けている」と米上院外交委員会で証言しました。

それでも、ポンペオ長官は、トランプ大統領の1期目の任期が終わる、2021年1月までに、北朝鮮の非核化を実現したいという意向を明らかにしています。かえってトランプ氏の方が「非核化に期限は付けない」と発言しています。

朝鮮半島の非核化の過程で、アメリカ側が想定しているベストな「北朝鮮の非核化」の方法は、「CVID」完全、かつ検証可能で、不可逆的な核兵器廃棄」です。

しかし、アメリカ側が「CVID」の実施を目指す限り、米朝両国の思惑は、なかなか一致点を見出せ^{みいだ}ないでしょう。その為、ポンペオ長官も、「CVID」という言葉を自ら封印し、「当面の外交的進展を目指す」と抽象的な表現に言い換えました。

ポンペオ氏は、比較的柔軟な姿勢ですが、ホワイトハウスには、ボルトン大統領補佐官のような「強硬派」もいるので、北朝鮮側も「ディール（取引）」の姿勢を崩しません。

とくに、ボルトン氏とマティス国防長官は「拙速な終戦宣言」に反対と伝えられています。8月末にポンペオ氏が、4度目となるはずだった訪朝予定を、トランプ氏の指示で急遽、きゆうきよ取りやめたのも、その表れです。

トランプ氏は、「中国が非核化プロセスに協力しなくなったからだ。ポンペオ氏は、中国との貿易問題が解決してから、北朝鮮に行く事になる」とコメント。もちろん、中国外務省は、「事実と異なり、無責任だ」と反発しました。

一方、北朝鮮側は、労働党機関紙『労働新聞』で、「米政府は裏表がある」、「米特殊部隊が北朝鮮侵入の訓練を行っている」と批判しました。

これらの動きや、一見、なにが問題となっているのかわかりにくいやりとりも米朝間の微妙な駆け引き、「デール」の一環という事になるでしょう。

中国とロシアは、「完全な非核化」は相当、困難だと見ていて、現状で凍結出来ればいいのではないかと考えています。

つまり、北朝鮮がすでに核兵器をいくつか持っているとしたら、それをすべて凍結状態にして、これ以上の核開発を続けさせなければいい、という事です。これは、アメリカの「完全に廃棄」という思惑とはかけ離れています。

交渉ごとは、利害関係があるすべての当事者の主張と思惑が一致しない限り、具体的な

行動に踏み出せなくなります。このままでは、過去の「交渉失敗」の繰り返しになってしまいかねません。

米、韓、そして、日本、中国、ロシアは、いずれも北朝鮮に関して直接利害のある当事者といえます。その中でも、もっとも客観的な立場に立つ事が出来る日本こそが外交手腕を発揮するべきなのです。

米口はつねに対決モードだし、米中も貿易摩擦で紛争中。南北だけが平和友好モードというのでは、話が前に進みません。

この行き詰まった状況を打開する事が出来るのが、北朝鮮との関係で軍事、政治、経済面でさほど深みにはまっていない立場の日本の存在だと思っています。

日本の外交手腕の真価が問われます。少なくとも、言を左右にしがちなトランプ式のアメリカ外交に追隨しては、日本の存在感は薄まるばかりです。

P-3 トランプ大統領を安心させた金正恩氏の「親書」

●米朝会談の裏の「主役」

米朝首脳会談は、トランプ氏自身がいったん、6月12日の開催を決めておきながら、一時、「中止、または延期」と表明しました。

この背景には、5月16日に北朝鮮の金桂寛^{キム・クワン}第一外務次官が、「米国が一方的に核兵器の放棄を要求するなら、6月12日の米朝首脳会談を中止する」と発言した事や同月24日に崔善姫^{チ・ソンヒ}外務次官が、「我々は対話を哀願しない」、「会談場で会うのか、核対核の対決の場で会うのか」などと主張した事があり、トランプ大統領は、すぐに反応を示しました。

5月24日に、トランプ大統領は、突如として「北朝鮮が、憤りと敵意をあらさまにす

るなら会談は中止だ」と開き直ったように発表し、金正恩委員長に対して書簡を送りました。

その書簡の中で首脳会談の中止を通告、トランプ氏は、

「あなた（正恩氏）は自らの核攻撃能力について語っているが、我々の核能力の方が圧倒的で強力だ。この能力を使う時が来ないように、私は神に祈る」

と記し、会談の中止・延期ばかりか、「核攻撃」の可能性までちらつかせました。

この日、北朝鮮は、「非核化」の表れとして、北部の核実験場・豊溪里^{ブンゲリ}の施設を爆破、破壊しました。この施設の爆破は、米英を初め、中・韓・露の取材団に公開されました。

しかし、アメリカが求めている、「爆破現場での核開発の専門家の立ち会い」はなく、実験場が完全に破壊されたかどうかの検証ができない、というアメリカ側に言わせれば「不十分な状況」でした。

ところが、トランプ氏は、「中止」の発言からわずか1日で変心し、改めて予定通りにシンガポールで米朝首脳会談を行うと発表したのです。この背景には明らかにそれ以前とは違う力学が働いていました。

その変心には、拉致被害者・横田めぐみさんによるメッセージの影響があった、というのが私が得ている情報です。

この情報の背景については、第4章で詳述します。

P-4 北朝鮮の知られざる国力・資源力と可能性

●人口7600万人の朝鮮半島がアジアの「ハブ」となる

日本に住む人の多くは、安倍政権やマスコミによる一方的な世論誘導もあって、「北朝鮮は、何をするかわからない国、テロ国家だ」という印象を昨年までは強く与えられていたと思います。

確かに、北朝鮮による度重なるミサイル発射実験は、日本の多くの人々に「ミサイル攻撃」の恐怖を与えました。ただ、北朝鮮が、これら一連のミサイル実験によって求めている事は、日本を恐怖に陥れる事ではありませんでした。

あくまで、目標は「アメリカとの直接交渉」で、米朝首脳会談に結果として漕ぎつけた北朝鮮は、一定度その目的達成に成功したと言えるでしょう。

その目的達成は、文在寅政権が成立した事から始まったと言っているでしょう。韓国の多くの市民は、朴槿恵政権に「NO!」を突き付け、大々的なデモを行いました。その背景には、朴槿恵氏の汚職事件追及だけではなく、南北の正常化という大きな課題があったのです。

あの膨大な民衆によるロウソクデモ参加者全員が、南北融和を求めていたとは思いますが、「腐敗した保守ではない政治」が求められた事は確かでした。

そして、その結果、文在寅政権が成立したのです。

今、南北首脳会談の実現を踏まえて一つだけ言える事は、「南北和平は、やる気になれば出来る」という事です。

文在寅大統領は、元々、北朝鮮との和平路線を推進する事を公約とし、盧武鉉元大統領の選挙では、選対本部長を務め、盧武鉉政権では、大統領秘書室長として北朝鮮との交渉の窓口役を担いました。

07年10月の第2回南北首脳会談では、文氏は南北会談推進委員長として「10・4宣言」を取りまとめ、その中で「朝鮮戦争終戦宣言」から「平和協定」までの道筋を明確にする

重役を果たしたのです。

盧武鉉氏が不審な「自殺」を遂げた後、文氏は、金大中元大統領から北朝鮮に対する「太陽政策」を託されたと言われ、金大中氏亡き後、弁護士業の本業から政界に転身、「革新と統合」という新党の結成に参加、共同代表となりました。

文在寅氏が「共に民主党」の大統領候補として17年に立候補し、大統領になった瞬間に、「南北会談の奇跡」は約束されていたのです。

この「奇跡」が明らかにした事は、北朝鮮が、いかなる形態であっても、一つになれば、ものすごい「力を発揮する」という事です。

北朝鮮の人口は、約2500万人。韓国は、約5100万人、合計すれば7600万人と、アジアではタイやミャンマーを凌^{しの}ぎ、欧州諸国と比較すると英国やフランス、イタリアより人口が多いのです。国勢という点でも一気に中堅国に躍進します。

とくに北朝鮮は、「テロ国家」というマスコミ報道しか伝えられていなかったで、その真の姿が見えませんでした。

著者は、これまで何度も北朝鮮の実態を現場で目撃し、その真実の姿を映像にも収めてきました。その実態は、日本で伝えられているものとはかけ離れた、「発展する国家」そのものでした。

一例を挙げると、その資源力の豊かさです。

石炭資源が豊富である事は、中国に輸出されてきた事からも知られていますが、その他の鉱物資源も豊かなのです。

鉄鉱石、レアアース、ウランなど、外資が入って本格的に採掘すれば、北朝鮮は一気に資源大国となります。とくに、電子機器などに用いられるレアアースは、実に中国全土の埋蔵量の2倍ともいわれます。

また、北朝鮮は、日本でも報じられ話題になっている馬息嶺^{マシニョク}スキー場リゾートを始めとして、リゾート開発にも力を入れています。日本海沿岸の元山^{ウォンサン}では、空港周辺にリゾートホテルらしきビル群や別荘風の建物、約170棟の建設が進められているといえます。これらは、主に中国や台湾、韓国、ヨーロッパ各国、東南アジア各国からの観光客の誘致を目指しています。

この事実からもわかるように、北朝鮮は、日米政府が言うような「孤立した国」ではなく、約160カ国と国交のある、開かれた国です。

実際に、スキー場の施設などは、スイスを初めヨーロッパ各国の出資と技術で建設されています。

北朝鮮は、リゾート開発による「観光立国」を進めていて、日本のマスコミで言われて

いるような「テロ国家」ではないという明らかな証拠がここにあると言えるでしょう。

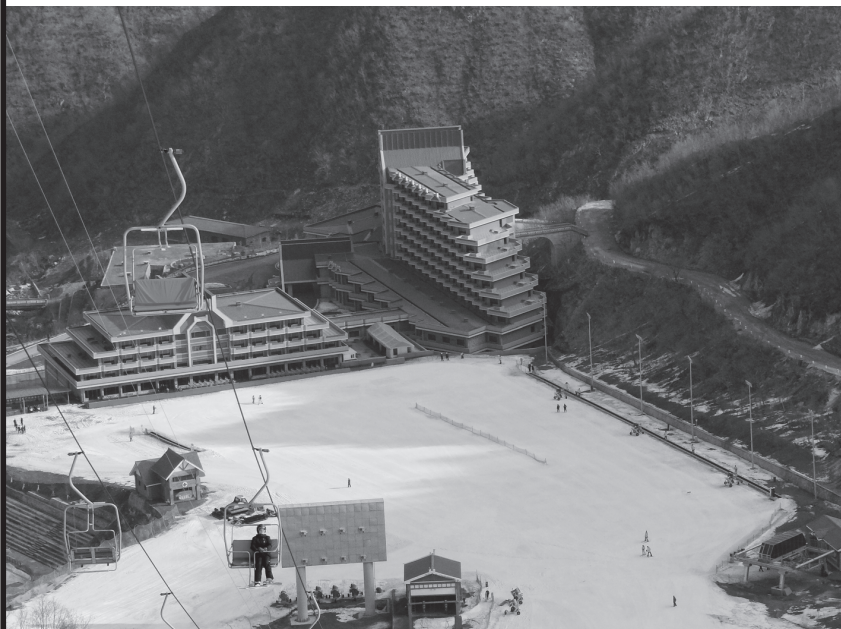
これまで、南北が分断されていた事で、朝鮮半島は、いわばアジア大陸の「盲腸」のような存在でした。しかし、今後、南北が融和し、鉄道、道路、物流、人の行き来が活発化すれば、「アジアのハブ」として機能します。

「ハブ」とは、自転車などの車輪の中心にある主要な部品の名前で、そこから車輪のスポークが周囲に360度、枝を伸ばしている事から「地域輸送・交通の中心地・中継地」を意味します。

すでに、韓国の仁川インチョン空港が、東アジアにおける「ハブ空港」として機能している事を見ても、大陸と接している朝鮮半島の地政学的位置は、島国の日本よりはるかに有利なのです。

中国、ロシアと陸続きで、海を隔てて日本とも隣接する朝鮮半島が、東アジアとヨーロッパ、アメリカへの「ハブ」としての機能を果たす時、北朝鮮も韓国も、これまでにない飛躍的な発展を遂げる事は間違いないのです。

北朝鮮と韓国が融合した朝鮮半島が秘める真実と、その未知の力と可能性を、本書でつぶさに追っていきます。



マシニヨン
北朝鮮は、馬息嶺スキー場リゾートの整備を初め、リゾート建設に投資を集中している。

第1章

日本と朝鮮半島の深い関係